



ことばと格闘中



国語科教育

きのした

木下 ひさし 小学校教諭

東京学芸大学、同大学院修了。1989年より現職。
著作に『読み合う教室へ』『ことば遊びの王様』
『国語科授業用語の手引き（共編）』『国語教室
宣言（共編）』『子どもたちのことば探検（共
編）』など。小中学校国語教科書編集委員。日
本文学協会、日本作文の会、日本児童文学学会、
日本国語教育学会等に所属。

成蹊との出会い

卒業論文を書かなくては、でも何を書こうかと迷っていた学生時代の後半ころ、ひとつの方向性を示してくれた本があります。滑川道夫著『映像時代の読書と教育』という新書版の小さな本です。滑川氏の膨大な著作群のなかではさほど注目されてはいませんが、私にとっては忘れられない本です。ことばの教育ってなんだか面白そうだなぞと思わせてくれたのです。

卒業後、四年間の小学校現場経験を経て大学院に進みました。国語科教育専攻でした。そこで国語科教育史の基本文献とし



「成蹊」と出会った3冊の本

て示されたのが、飛田多喜雄著『国語教育方法論史』でした。国語科教育の歴史は単なる読み書きの歴史ではないことを知らされました。

そして、子どものことばの教育を自分の研究課題としたとき、研究室の薄暗い書架で基礎資料として見つけたのが、西原慶一著『日本児童文章史』でした。

この三冊の著者の経歴を見て驚きました。三氏とも成蹊小学校という小学校の教師をしていたのです…。

これが私と成蹊小学校との「出会い」でした。国語科教育史に大きな足跡を残す三氏が勤めていたという学校、いったいどんな学校なんだろうと当時は思ったものでした。ちなみに、後から知ったのですが、一九三九年から一九四一年までの三年間はこの三先生は同時に成蹊小学校で学級担任をしておられたのです。

伝統に連なりつつ

その学校に今自分がこうして在職しているとはなんとも不思議な縁を感じます。この三先生をはじめとする諸先輩から続く「成蹊」の伝統を担っていかねければならない責任も感じます。

ただ、伝統といってもそれは昔ながらの材料で昔ながらの授業を行うということではないでしょう。それは、目先の流行やら社会状況に左右されず、子どもにとって大切なことは何かという本来の教育のあり方を今日的に追究し実践していく姿勢だろうと勝手ながら考えています。

古くて新しきもの

本稿が目にとまるときには新しい学習指導要領が告示されているはずですが、その要領の国語科編

の編纂過程で強調されてきたのが「PISA型読解力」というものです。詳しい説明は省きますが、簡単にいってしまうと、映像やら図表といった多様なテキストを読解し表現していく力です。一部では今日的で新しい考え方のようにとらえられました。滑川先生の先の著作には同様の内容が書かれているのです。この本質は変わっていないということでしょうか。

『思考と行動における言語』（S・I・ハヤカワ著、大久保忠利訳）という本があります。「一般意味論」という理論の解説書として半世紀以上前に書かれたものですが、そこで示される内容は十分に現代の国語教育、つまり言語の教育に生かせるものです。いや、IT時代と呼ばれる現代にこそ生かさなければならぬ言語論なのです。

このように、新しいようで古い、古いようで新しいのが国語科、すなわち「ことば」の教育です。先の読解力養成といった現代社会からの要請という今日的な課題にも対応しなければなりません。その一方で、ことばが人間形成に深くかかわることを考えれば、言語操作の教育のみで国語科教育を終わらせたりはなりません。こういう現代だからこそ例えば優れた文学作品の持つ教育的な力も考えていきたいのです。と、日々「ことば」と格闘しています。でも、ことばは友だちです。



理科フィールドワーク 秩父・長瀬にて